

# 赤ちゃんふれあい体験学習の効果に関する研究

佐々木知映<sup>1)\*</sup>, 古川照美<sup>1)</sup>, 佐藤愛<sup>1)</sup>

1)青森県立保健大学

**Key Words** ① 赤ちゃんふれあい体験学習 ② 親性準備性 ③ 向社会的行動

## I. はじめに

日本の学校では、子育てに関して学習するための教育や親性準備教育として、乳幼児と接する赤ちゃんふれあい体験学習が存在する<sup>1)</sup>。ベースライン調査では、乳児との関わりが親性準備性や向社会的行動の発達に関連要因であることが明らかになった。本研究では、赤ちゃんふれあい体験学習が、参加者の親性準備性や向社会的行動の発達を促すかを調査する。

## II. 目的

赤ちゃんふれあい体験学習に参加した小・中学生の親性準備性、向社会的行動の発達を促すかを明らかにすることを目的とする。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象および調査内容

調査協力を承諾を得られ、令和2年度にベースライン調査を行った市町村・学校において、令和3年度に赤ちゃんふれあい体験学習に参加した小・中学生を対象とした。ベースライン調査と同様の内容（学年、性別、家族、乳児が好きか、乳児との関わり、ボランティアへの参加回数、小・中学生用対象別向社会的行動尺度<sup>2)</sup>、親になることへの準備状態測定尺度<sup>3)</sup>）と、感想記載欄を設けた自記式質問紙を学校の教員が配布し、任意で調査した。回収は、学校の教員が記入済みの自記式質問紙を研究代表者に郵送した。令和3年度はCOVID-19感染予防のため、調査協力を得られたすべての学校において、乳児との直接のふれあいは行わず、妊婦体験ジャケットの着用や新生児モデルを使用した着替えやおむつ交換、抱っこなどを実施していた。

### 2. 分析方法

学習参加前後における変化について、属性（家族、乳児が好きか、乳児との関わり、ボランティアへの参加回数）はMcNemar検定、尺度はWilcoxonの符号付順位検定でそれぞれ有意差を分析した。先行文献<sup>4)</sup>やベースライン調査、McNemar検定で有意に各尺度に関連があった属性（性別、乳児が好きか、乳児との関わり、ボランティアへの参加回数）を独立変数、各尺度を従属変数とし、一般化線形混合モデルを用いて検討した。変量効果の交差効果因子変数として「乳児が好きか」を指定した。各尺度においては、効果量を算出した（Cohen's d）。乳児との関わり・ボランティアへの参加回数におけるMcNemar検定はEZRver1.54、それ以外はStataBE /17を使用して分析した。感想は、KH Coder 3を用いてテキストマイニングにより分析した。

## IV. 結果と考察

自記式質問紙を配布した422名中411名より回答があり（回収率97.4%）、記入漏れのない350名を解析対象とした（有効回答率82.9%）。McNemar検定において有意に変化があった属性は「両親と暮らしたことがある/なし（ $P=0.03$ ）」「祖父または祖母と暮らしたことがある/なし（ $P=0.004$ ）」

---

\*連絡先：〒030-0962 青森市佃三丁目1-26 コスモコート佃202 E-mail: rn1370666@gmail.com

「ボランティアへの参加回数 (P=0.004)」であった。ボランティアへの参加回数は、0回と5回以上が減っていた。コロナ禍において家族構成の変化が全くないわけではないが、ボランティアの機会が少ない可能性が考えられた。Wilcoxonの符号付順位検定では、親性準備性尺度(P<0.001)、向社会的行動尺度(P=0.003)であり、有意に得点が増加していた。一般化線形混合モデルの結果、親性準備性尺度得点の増加には「女子 (P<0.001)」「両親と暮らしたことがある (P=0.001)」「乳児が好きである (P<0.001)」「乳児と関わった経験がある (P<0.001)」が関連していた。Wald検定より、有意なモデルであった (P<0.001)。Cohen's d=0.14 であるが、親性準備性尺度得点は有意に上がっており、効果量としては小さいが効果はある可能性がある。向社会的行動尺度得点の増加には「乳児が好きである (P<0.001)」「乳児との関わった経験がある (P<0.001)」「ボランティアへの参加回数が多い (P=0.001)」が関連していた。Wald検定より、有意なモデルであった (P<0.001)。Cohen's d=0.11 であるが、向社会的行動尺度得点は有意に上がっており、効果量としては小さいが効果はある可能性がある。

感想について、100回以上の頻出語は「赤ちゃん (540回)」「思う (415回)」「大変 (226回)」「分かる (222回)」「知る (133回)」「体験 (129回)」「抱っこ (121回)」「自分 (110回)」であった。階層的クラスター分析では「妊婦体験でお腹の重さを学んだ」「赤ちゃんの抱き方を知り大変だと思った」「人形だがおむつ交換や着替えが難しい」「自身の母親の出産」「親への感謝」「子育ての大切さ、お世話の楽しさを感じた」の6つのカテゴリで構成された。頻出語上位5語と「抱っこ」は「赤ちゃんの抱き方を知り大変だと思った」のカテゴリである。別のカテゴリの一部で「人形だがおむつ交換や着替えが難しい」もある。このように、大変・難しいなどの感想が多くある一方で、お世話の楽しさや子育ての大切さ、自身の親への感謝や将来自分が子育てすることについての感想もあり、それぞれ「子育ての大切さ、お世話の楽しさを感じた」「親への感謝」「将来自分が子どもを育てる」のカテゴリで構成された。「妊婦体験でお腹の重さを学んだ」では、その学びから今後妊婦に会った場合の配慮などについて記載があった。全体として、赤ちゃんのお世話の大変さや難しさを感じつつも、親性準備性や向社会的行動の発達に影響があったことを示唆させる内容であった。

以上のことから、赤ちゃんふれあい体験学習は、乳児との直接のふれあいでなくとも参加した小・中学生の親性準備性、向社会的行動の発達を促していることが示唆された。今後、乳児との直接のふれあいが可能となってから再度調査を行うことが課題である。

## V. 文献

- 1) 厚生労働省. 乳幼児と中・高校生とのふれあい事業事例.  
<<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate10/pdf/data.pdf>> (2022. 2. 3)
- 2) 牧野カツコ, 中西雪夫. 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第1報) : 「準備状態」の測定尺度の作成. 日本家庭科教育学会誌. 1989, 32 (2), 51-53.
- 3) 村上達也, 西村多久磨, 櫻井茂男. 家族, 友だち, 見知らぬ人に対する向社会的行動-対象別向社会的行動尺度の作成-. 教育心理学研究. 2016, 64, 156-169.
- 4) 岡本祐子, 古賀真紀子. 青年期の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析. 広島大学心理学研究. 2004, (4), 159-172.

## VI. 発表 (誌上発表、学会発表)

第63回 日本母性衛生学会総会・学術集会 (予定)